

中井正一と『土曜日』のジャーナリズム

中 村 保 彦

1. 読者論をめぐる視点

1. 1 前稿からの課題

前稿(中村2008)において、コミュニケーション史の視点からいくつかの問題を提示した。ひとつは、読者あるいは大衆が言葉を平等にもつためには何が重要なのだろうか、との問題意識からリテラシーの概念を取り上げた。そして、大衆の中に間主観的な合理の広がり期待した中井正一が、影響力のある実践を展開しえなかった理由の一つは、批判的リテラシーに相当する課題が見えていなかったからだろうと疑問を呈した。また、コミュニケーション史的な視点から『土曜日』の読者論に言及し、今日でこそ、マス・メディアの圧倒的な隆盛のなかにあって、マスコミに対する「ミニコミ」的なメディアの機能や情報が注目され評価されつつあるけれども、『土曜日』はその機能においてミニコミ的なメディアの先駆だった、と述べた。

しかし、前者のリテラシー概念に関しても説明不足から論じ残した点があり、後者の『土曜日』のミニコミ的な先駆性に関しては十全な説明をしていなかったと考えている。したがって、本稿は、この二点に関する補論として、ひとつは、中井論の本筋から少し外れてしまうけれども、コミュニケーション史における読者のリテラシー概念について、もうひとつは、『土曜日』のジャーナリズムとしてのミニコミ的な特徴について論じることを目的にする。

1. 2 ジャーナリズムの資料

中井正一に関する文献に、普段なら見過ごしてしまいそうな表現がある。たとえば、鶴見俊輔は、「戦後からの評価」に次のようなことを書いている。「委員会の論理」について、今(執筆した1959年当時)どこの図書館を探しても見られない『世界文化』に掲載された「委員会の論理」を一般の読者に送り届けられるのは、書かれてから二十年目の今がはじめてではないだろうか、と

(鶴見1962 286)。また、久野収も『土曜日』復刻版に寄せて書いた文章に、官憲の加えた傷跡は如何ともしがたく、18号、26号、33号、43号、44号がどうしても見つからないため欠号のまま復刻されるとし、新聞という形式も、散逸と消滅を助ける結果になったのであろう、と述べている(久野1974 7)。

ラジオやテレビが現れる前の時代、ジャーナリズムとは新聞・雑誌のことを言った。その『土曜日』という新聞が散逸・消滅しやすいメディアであると久野はいい、「委員会の論理」を掲載した『世界文化』という雑誌はどこかの図書館を探してもないといふ鶴見はいう。この一見、当たり前前の表現に対して、筆者が図書館の司書だからかもしれないが、「新聞」、「雑誌」、「図書館」というキーワードに、つい反応してしまう。なぜなら、図書館にとって、新聞・雑誌といった継続して刊行される資料の収集・保存には、多くの困難があることを痛感しているからだ。一般的にこれら両資料は、現在進行形の刊行物として欠号なく収集するためには、費用や保存スペースなどを要する。資料のデジタル化が進みつつあるとはいえ、新聞に至っては、原資料として価値のある新聞原紙を製本もしくはデジタル化して保存している図書館は一部の大学・専門図書館を除いて稀だと思う。

図書館界において、新聞や雑誌は、通常「逐次刊行物(serials, serial publications)」という資料群として扱われる。①ひとつのタイトルのもとに、②終期を予定せず、③巻号・年月次を追って逐次刊行される資料のことをいう(日本図書館協会図書館用語委員会1988などの定義)。新聞、雑誌、年鑑・白書などの定期刊行物から不定期刊行物も含まれる。これらの資料は、1回の発行をもって表現が完結する単行書(monograph)と違い、定義の通り終期を予定せず巻号・年月次を追って刊行されるため、休刊・廃刊しない限り表現は継続していく。ジャーナリズムの語源となるジャーナルの原義「毎日つけられる記録」(『オックスフォード英語辞典』[OEDと略す]、“journal”の項)から見れば当然のことだ。それゆえに、ジャーナリズムの資料は、時代を表現するメディアとして休廃刊などの理由により、ある種のみとまりとして捉えられる資料があったとしても、久野がいったように散逸・消滅しやすいメディアには違いなく、資料全体を収集・保存することは難しい。まして、官憲の弾圧を受けるようなミニコミ的なメディアに至っては、尚更のこ

とだ。だが、フランス国立図書館(BnF: Bibliothèque nationale de France)のように、設立の背景や歴史性が異なるとはいえ、1968年の「五月革命」後の学生運動資料をガリ版刷の粗末なパンフレットに至るまで収集・保存している図書館も世界には存在している。日本においても社会の上層部にあった人々の資料に限らず、社会の基層をなす人々の資料についてもっと目を向けるべきだろう(平川2002 85)。

そのジャーナリズムの資料にあつて、「ミニコミ」と称される資料がある。ミニコミは戦後生まれの和製英語である。1960年代、竹内好が提唱した市民の自主的に発行する小さなメディアが始まりだという。ミニコミというと、マスコミと正反対のマスコミに比肩するメディアとして受け取られ勘違いされやすいけれども、本来、大きいものは権力を発生するとの考えにより、「マスコミに比肩」するという考えはなかったようだ。丸山尚は、ミニコミの特徴を次のように提示している(丸山1988)。

1) ミニコミは自発的に行う多様なコミュニケーションの総称。

人に伝えたい意見や情報を持っている者が、それに適した方法(書く、喋る、写す、など)によって意見を伝えあう。定期的に送るのがミニコミ紙・誌であり、一時的に伝えるのがビラ、チラシ。

2) ミニコミは人間がメディアの原点。

何らかの形でつながりのある周囲に働きかけ範囲を広げていく、つながりや思いの共有がある。何ら関係のない人々に巨大な装置とメカニズムによって情報を送るマスコミとは異なる。

3) ミニコミは少数者の意思表示。

少数者の立場から多数者への働きかけを行う。持続性と共感を得るためのソフトな感性が要る。

1) 自発性、2) つながり、3) 少数者、といった上記の三点は、本来、ジャーナリズムの原点ともいえる特徴だと考える。また、この諸点において、前稿に取り上げた中井正一らの『土曜日』というメディアは、ミニコミ的な特徴を備えていたと思う。詳細については、後の章に述べたい。

2. 文字社会とリテラシー概念

2. 1 リテラシー概念の歴史性

読者のリテラシー概念について、前稿は、佐藤学による教育概念としてのリテラシー論(佐藤2003)を援用しながら、その歴史性に言及した(中村2008 23)。しかし、日本における図書館史・読書史や教育史の言説には、リテラシー概念の安易あるいは拡大適用と感じられるものがある。今、前稿の引用文献に関連し過去に遡っての学説史的な議論を蒸し返すことは紙幅の関係からも避けたいが、筆者が前提としているリテラシー概念の捉え方に関して、要点を二つ提示しておきたい。

まず、リテラシー(literacy)という概念は、佐藤が論じているように、言葉の歴史をたどると(OED、“literacy”項など)、学校において教授される「共通教養」としての「読み書き能力」を意味し、19世紀末に教育概念として現れた(佐藤2003 292)。英語圏における言葉の歴史はともかくとして、教育概念として現れたリテラシー概念が「西欧における」読者層(reading public, common reader)の説明概念として用いられた。したがって、西欧社会における読者層を対象として用いられた概念を日本の歴史社会に適用する際、西欧の文字社会と日本における統治のための文書主義が中心にある文字社会との違い(網野1990 355)や西欧と日本の対象となる読者層のあり方、さらにはいうなら、支配階級と被支配・下層階級との隔絶や階級移動など歴史性、社会的な文脈が異なる点に注意すべきだと考えるのだが、実際には、それらの違いは捨象され現代の視点から拡大使用されているように思う。

もう一点、日本の読者層を対象として、今日の日本史学や文学史、教育史の学問的な成果から、下記のような諸点が現在の通説とされている。江戸時代、特に文化文政期ぐらいからは、「文字社会」といえる社会状況が成立していた(網野1990、青木1985)。ここにいう「文字社会」とは、網野善彦がいう非識字層の「無文字社会」に対して識字層が形成する文字使用が不可避に組み込まれた社会をいう(網野1990 319)。また、文書書式を規定した「書札」の体系などから文字文化の共通化が進み、17世紀の「メディア革命」の時期には文字文化が浸透していく(辻本2008)。それらのことが、明治期の国民国

家形成と教育制度浸透の文化的な前提になったことも確かだろう。しかし、江戸時代における文字社会の成立が、様々な階級性を越えて読者層の「大衆化」を進めたかどうかは疑問点が残る。17世紀から後に浸透していった文字文化には地域的な差異は少なかったとしても、階層差や性差による違いは依然としてあったと考えられる。また、史料的に注意すべき点は、リテラシー・読書史の学問的な蓄積のある西欧においても江戸時代の日本においても、読み書き能力の量的な推移を正確に測定することは困難だと考えられており、自署能力を基準として識字率調査が行われたのは明治期の史料からだ(辻本2008 41-42)。したがって、権力の側が前提としていた文書の広範な存在や一定の読者層を対象として流布された書物の増加などを理由として、全国的に高いリテラシー社会が形成されていたと結論付けるのは、無理があると考ええる。なお、読者層に関しては、すでに「江戸時代貸本屋略史」の著者が次のような疑問点を述べている。すなわち、「江戸期の全国人口の約80%を占めていた当時の農民の読書(中略)庶民階級というのには、庄屋をしていたような上層農民はふくまれていたが、その主たるものは、商業・工芸に従事するところの町人であった。町人は当時の人口の13%をしめるにすぎない階級」であり、農民に比べて言うに足りない人口にもかかわらず「このわずかな数の町人が江戸期の文化を町人文化として代表していることに大きな空白感」があった(広庭1967-2 202)。この貸本屋に関する先駆的な論考が書かれてから40数年が経つ。現在、網野がいうように村落における史料・文書の探訪が進み、村落や都市の上層から中層にいたる被支配者層に識字能力や係数能力をもった人々の存在も確かめられつつある。しかし、「江戸時代の基底に、なお広範な無文字社会がひろがっていた」(網野1987 41, 45)ことは無視しえない。もし、「言うに足りない人口」の町人層をもって、江戸期に広範な読者層が存在していたようにいうなら、それは階層差を捨象した過度な一般化と言わざるをえない。

2. 2 文字社会と読者の位相

いつの時代のどういった人々のことを「読者」というのか、後世の用語や説明概念をもって定義しようとする限り、ある種の制度的な転倒性は避けら

れないだろう。読者層の「大衆化」などといった類の表現はそれに当たるかもしれない。

イギリス18世紀における読者層を描いた論考において、“public”や“common”が意味する不特定な多数の読者層が成立するためには、次の二つのことが重要だと論じている(永谷1982)。すなわち、①“the ability of reading”と②“the habit of reading”である。特に、②については個人的・規則的な読書が可能になるための文化的な「余裕」に注目し、リテラシーを持たなかった下層階級が、仕事のための時間・空間とは別に、如何にして富を獲得し読書のための時間と居住空間を獲得し中産階級となっていたか論じている。あえて、イギリス読者層の論考を引用したのは、現代の「常識」からイメージされている読書には労働とは別の余裕、すなわち個別の時間と空間が要するという当たり前のことを喚起したかったからだ。しかも、その「余裕」の成立には下層階級から中産階級への階級移動が前提となっている。しかし、前項に言及した日本の文字社会の議論には、こういった読者の細部、位相差への注意はほとんど見られない。わずかに、史学における文字と女性に関する論考(藪田1995)などがあり今後の蓄積に期するしかない。

また、どのような階層の人々がどのような生活において何を読む(筆写も含めるなら読み書き)のか、という対象となるメディアと生活における位置づけも重要な要素だろう。学者や武士のような儒教思想に即した読書階層、僧侶のように修行と一体化して祖師の著作や経典を読む階層、三都を中心とする都市商人が貸本屋を利用するような階層、寺子屋にあって往来物をテキストに学ぶ町人の階層などは、対象となる書物も違えば、読書内容・目的も違うのが当然だ。これに関連して、前稿にも引用した山代巴は、彼女の祖父や父の学びと過去の記録に触れている。祖父は、田頭(たかしら)と呼ぶ寺子屋で「阿部野童子問」「西備遠藤実記」という備後福山領の天明一揆(1786年)に関する二つの記録を写本し、そのことによって、文字を学ぶことを越えて世の中を変えるとはどういうことかを学んだという。そして、1873(明治6)年生まれの父も同じ寺子屋で教育を受けこの藩政を変えた大勝利の一揆について学んだという(山代1995:32)。このような例は、直接的な読書といえないにしても、教育史とリテラシーの位相を考えるうえで参考になる。

3. ミニコミのジャーナリズム

3. 1 ジャーナリズムの思想

コミュニケーション論とともに早くからジャーナリズム論を展開していた鶴見俊輔は、明治期の日本に輸入された舶来の言葉としての「ジャーナル」（ジャーナリズム）について述べている。「ジャーナル」（ジャーナリズム）は、本来、ヨーロッパの文脈においてもっていた「毎日の記録」という意味を失い、市民が毎日つける日記との連想からも離れてしまった。そして、新聞社や雑誌社など特定の職にいる者の職業的活動を越えて、市民のなしうる記録活動全体の中にジャーナリズムの根を発見することに日本のジャーナリズム復活の希望があると論じた（鶴見1965 8）。さらに、OEDの“journalism”の意味を引きながら、歴史とジャーナリズムを区別しジャーナリズムの特色を論じている。すなわち、歴史は過ぎ去った事柄を回想の次元において捉えるが、ジャーナリズムは、現在起こりつつある事柄について、それらの意味を判定しえない状態において「未来への不安をふくめた期待の次元において」捉えると定義している（鶴見1965 28）。

また、民衆ジャーナリズムの資料を丹念に探訪し歩いた門奈直樹は、地方ジャーナリズムにこだわる理由をこう述べる。「ジャーナリズムはすぐれて实际的、現実的な批判活動を内容に含みながら、それは民衆の暮らし、喋るといった往復運動のなかで生起する日常の記録活動である」。他人の痛みや苦しみを自らの痛みや苦しみとする言論が、「中央の知的エリートにおいてよりも、むしろ地方の民衆言論に凝縮されてみえてくると思うからだ」（門奈1983 8）。

鶴見や門奈の「ジャーナリズムとは何か」という原点の問い直しに共通するのは、市民あるいは民衆による日常の記録活動、という点だろう。しかもそれは、生の営為に寄り添って痛痒感覚をもち、未来を期待の次元において捉える活動だ。そして、前に言及したミニコミに即していうなら、丸山がいうように、ジャーナリズムの発生時においてメディアはみなミニコミだった。ミニコミのもつ個性、自立性、反権力性がジャーナリズムの原点だからである。しかし、マスコミ、マス・メディアが圧倒的な優位の時代になると、「公

正・中立・客観」が支配原理となり、やがて商業性が肥大化してくると、誰にも受け入れられやすい言論表現に変わりジャーナリズム性が希薄になる(丸山1985 7)。

3. 2 『聖化』と『土曜日』

『土曜日』の発刊とその周囲には様々な人々が関わっていた。中井正一の「委員会の論理」を掲載したのは『世界文化』だが、それを背後から支持していた住谷悦治は、『土曜日』の改題前紙となる『京都スタジオ通信』の発展的な改組を提案したという(久野1974 5)。一方、住谷悦治が最も敬愛していた叔父、住谷天来は、地方にあって土着のキリスト者として個人新聞『聖化』を発行していた。今、住谷天来と住谷悦治の叔父・甥の関係と叔父から甥へ受け継がれた非戦平和(反戦平和と異なる)の思想については、住谷一彦らの編集による文献(住谷1997)があり、詳細はそちらに譲りたい。また、『聖化』をめぐる戦時下のキリスト教ジャーナリズムについても、すでに門奈の精細な論考がある(門奈1983)。

また、『聖化』と『土曜日』に関しては、前項に引用した丸山が、現在の「ミニコミ」の先駆というに相応しいメディアとし、「苦悶する知識人の声」として位置づけている(丸山1985 17-18)。『聖化』が廃刊に追い込まれた理由は廃刊号の「廃刊の辞」によってわかる。その後、自ら「黙庵」と号し、一人の良心的なキリスト者として生きた。また、『土曜日』も、厳しい言論統制のなか廃刊を余儀なくされた。それゆえ、この両紙の内容・位置づけに関しては、先行する諸論考に拠る。本稿は書誌的な項目を中心に概要を比べることによって、『土曜日』の特徴を概観してみたい。復刻版などを参考にしながら整理すると下記のようなになる。

(項目)	『聖化』	『土曜日』
タイトル:	聖化	土曜日: 憩ひと想ひの午后
編集:	住谷天来	林要、能勢克男
発行者:	聖花社 (住谷天来)	土曜日社 (斎藤雷太郎)
発行地:	高崎(1~96号、富岡町)	京都
刊行頻度:	月刊	月2回刊(1・3土曜日)
版型:	タブロイド版(6ページ)	タブロイド版(6ページ)
創刊・終刊:	1年[通号] 1号~149号	創刊号~44号(復刻版: ~42号)
創刊年・終刊年:	1927~1939	1936~1937
変遷注記:		前紙:『京都スタジオ通信』 改題(1~12号)
価格:	5銭(129号~、9銭)	3銭
配布部数:	1,000~12,000部	3,000~8,000部
広告:	有(教会員、開業医、商店)	有(飲食店、商店、映画館)

編集・発行に関して、『聖化』が住谷天来の個人新聞であり、編集・発行はもちろん執筆も住谷天来・朝江夫妻が中心となっていた。『土曜日』の方は、書誌的な項目に中井正一の名前は現れてこないが、久野がいうように、実際の編集・発行は能勢克男と中井正一が行い、注目される巻頭言の大半を中井が執筆している(久野1974)。また、創刊・終刊の発行期間は、『聖化』の1~149号、10年を越える長い期間なのに対し、『土曜日』は創刊~44号の2年間で終わっている。それから、広告掲載について、『聖化』は広告依頼者の数から、天来個人に対する県内外の熱心な限定された教会関係者・支援者に支えられていたという(住谷1997 158)。一方、『土曜日』の広告は、店置きという手段によって配布されたことからか、京都市内の飲食店が多数である。その中には、『土曜日』編集部が常駐したという「フランソワ」の広告が度々現れている。後は映画館・映画スタジオなど映画関係、化粧品店、百貨店、さらに、書店広告とともに月刊『世界文化』の広告も時々載せられている。

それから、『土曜日』の紙面に関連して、長く『朝日ジャーナル』誌の記者・

編集者として活躍した村上義雄の文章がある。これは久野収について書いた書物の中の「週刊新聞『土曜日』の自由精神」と題する一節だ(村上2002 21-27)。この書物の第一章「青年・久野収、女子学生たちと過ごす戦下の日々」には、中井正一に言及した文章がいくつかあり興味深いのだが、『土曜日』に関する記述だけ参考にする。村上の手元の1本のビデオテープがあり「世界文化」「土曜日」の同人たちが映っている。それは、中井と姻戚関係に当たる人物がフィルムを発見し、ビデオテープにおさめたという。「土曜日が一周年を迎えた」とタイトルとともに、『土曜日』の紙面が映り、中井や能勢、久野らのも関係者も映っている。村上は『土曜日』の紙面を見て次のような感想を述べる。流行の先端を行くファッションをまとったパリジェンヌ風の若い女性イラスト。厳しい状況下とは思えぬどこかお洒落な空気、怒声よりも静かな語り口。そんな「わざ」にしばれる。そして、中井の巻頭言から読み取れる、ほとんど命がけの「自由」への願望。時代の緊迫した空気の中、「どうか生き方を間違えないようにしてほしい」と呼びかける思いが行間からわき上がってくるような気がするという。村上は『世界文化』が硬派の理論誌だったのに対し、『土曜日』はファッションブルで、映画などエンターテインメントの世界も取り上げ、お洒落で軟派の空気を漂わせながら、しかし、実は時代に向かって懸念を表明し異議申し立てを行うメディアだとし、まぎれもなく「時代のすぐれた証言者」だったと評価する。これは丸山と同じく『土曜日』のミニコミ性を語っていると思う。

まとめに代えて

本稿は、前稿の補論として二つの課題を論じた。ひとつは、コミュニケーション史における読者のリテラシー概念について、もうひとつは、『土曜日』のジャーナリズムとしてのミニコミ的な特徴について、住谷天来の『聖化』と比べながら論じた。

リテラシーに関しては、かつて名称が日本図書館学会(現 日本図書館情報学会)だった時代に「図書館史の中の読者：メディアとリテラシーのあいだ」という論題の発表をした(1989年6月2日、第37回大会、於 図書館情報大学)。

特に読者層(reading public)について、コミュニケーション史におけるメディアとメディアの受け手という関心から勉強してきたつもりだが、現在も疑問点は残ったままだ。その一つが、前半に取り上げたリテラシー概念を基軸とする問題だが、本稿が述べたように西欧(あるいはアジアの他諸国)と日本、彼我の歴史的な社会・公共性の概念・読者層の違いは、あちらの議論をこちらに当てはめてよしとするほど単純とは思えない。しかし、参考とすべき学問の関連領域は多岐に渡り、史・資料的な蓄積は多い反面、説明概念と発想のパラダイムは昔の借り物のまま、あまり進展していないように思う。前稿が、リテラシー概念に変わって、A.センの基本的潜在能力に注目したのは、そこに説明概念としての有効性を見たからだ。コミュニケーション史の課題について、簡単に答えは得られないとしても問い続けるしかない。

また、『土曜日』に関して、誰がどう読んだかという視点からの読者論と直接係わらないにしても、本論が言及した内容からさらに細かく調べる余地が残っていると考える。これらの詳論も他日を期したい。

【参考文献・註】

引用に関して、「人名 発行年 ページ数」とした。また、参考文献は、引用文献および本稿のテーマに関係するものとし全てを網羅していない。なお、形式は、SIST02 “Description of Bibliographic References” (2007)に準拠した。

網野善彦. 日本論の視座：列島の社会と国家. 東京, 小学館, 1990, 382p.

網野善彦. “日本人の知的能力をめぐって”. 神奈川大学評論, 1987, 1, p.39-47.

* 上記論考の主要な論点は、網野1990にも収録されている。

青木美智男. 文化文政期の民衆と文化. 東京, 文化書房博文社, 1985, 276p.

土曜日社[編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, 184p.

平川千宏. 市民運動・住民運動資料の収集、提供、保存. 山梨英和短期大学紀要. 2002, 37, p.92-77.

広庭基介. 江戸時代貸本屋略史1. 図書館界. 1967, 18(5), p.158-166, 178.

広庭基介. 江戸時代貸本屋略史2(完). 図書館界. 1967, 18(6), p.188-204.

- 久野収.“文化新聞『土曜日』の復刻によせて”. 三一書房[編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, p.1-7.
- 丸山尚. ミニコミ戦後史：ジャーナリズムの原点をもとめて. 東京, 三一書房, 1985, 319p.
- 丸山尚.“ミニコミ”. コミュニケーション事典. 東京, 平凡社, 1988, p.512-514.
- 門奈直樹. 民衆ジャーナリズムの歴史：自由民権から占領下沖縄まで. 東京, 三一書房, 1983, 273p.
- * 住谷天来の『聖化』に関しては本書の8章「戦時下のキリスト教ジャーナリズム」(p.190-216)を参考にした。
- 村上義雄. 人間久野収：市民哲学者、きたるべき時代への「遺言」. 東京, 平凡社, 2002, 205p.
- 永谷秀雄. 18世紀イギリスにおける読者層の成立について. 阪南論集, 人文・自然科学編. 1982, 17(2・3), p.13-22.
- 中村保彦. 中井正一と図書館のコミュニケーション. 同志社図書館情報学. 2008, 19, p.11-33.
- 日本図書館協会図書館用語委員会編集. 図書館用語集. 東京, 日本図書館協会, 1988, 396p.
- 佐藤学. リテラシー概念とその再定義. 教育学研究. 2003, 70(3), p.292-301.
- 聖化社[編]. 聖化. 復刻版. 東京, 不二出版, 1990, 2冊.
- 住谷一彦[ほか]. 住谷天来と住谷悦治：非戦論・平和論. 前橋, みやま文庫, 1997, 206p.
- * 同書の三部「寄稿ほか」に、手島仁氏による住谷天来と『聖化』に関する論考があり(p.149-161)、広告掲載、発行部数など参考になった。
- 辻本雅史編著. 教育の社会史. 東京, 放送大学教育振興会, 2008, 257p.
- 鶴見俊輔.“戦後からの評価”. 久野収編. 美と集団の論理：中井正一. 東京, 中央公論社, 1962, p.285-290.
- 鶴見俊輔編集. ジャーナリズムの思想. 東京, 筑摩書房, 1965, 388p.
- 藪田貫.“文字と女性”. 岩波講座日本通史15巻. 東京, 岩波書店, 1995, p.[223]-254.
- 山代巴[述]. 岩はいまだ割れず：民話で描く民衆の姿. 週刊金曜日. 1995, 59,

p.28-33.

(なかむら やすひこ。2009年6月20日受理)